



日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

派遣されるにふさわしい者が派遣される

フランシスコ会 村上芳隆

9月の始め、19年ぶりにパキスタンのフランシスコ会を訪問しました。そこには私の同期である松本貢四郎修道士が、1993年から宣教師として働いています。その訪問については、10月5日（土）ニコラ・バレでの「海外宣教師のお話を聞く会」で分かち合いました。

聖フランシスコは裁可された修道会則（1223年）に、非キリスト者のもとへ宣教に行く者のために規定を入れました。それは修道会の歴史で初めての事だといわれています。私自身、勉学、研修、会議等のために海外で生活したことはありますが、そこへ出向いていく宣教師になる事はありませんでした。というのも、自分はその「召命（神の勧め）」をいただいていたからです。

兄弟たちのだれであろうと、神の勧めにより、回教徒および非キリスト教徒のもとに行きたいと望む者は、自分の管区長に許可を願わなければならない。管区長は、派遣されるにふさわしいと認める者のほかには、だれにも許可を与えてはならない。（12章1-2）

♥♥もくじ♥♥

巻頭言	1
第74回運営委員会議事録	3
宣教師からのお便り	5
ザ・メッセージ ECHO	11
こんにちは! お久しぶりです	11
宣教師のお話を聞く会	13
新入会員・事務局より	16



また聖フランシスコは、未裁可会則 16 章(1221 年)で、宣教方法について記しています。「ところで、そこへ行く兄弟たちは、二つの方法をもって、彼らの間で霊的に生活することができる。一つの方法は、口論や争いをせず、『神のためにすべての人に従い』、自分はキリスト者だと宣言することである。もう一つの方法は、主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えて、全能の神・父と子と聖霊・万物の創り主を信じ、贖い主、救い主である御子を信じるように、そして洗礼を受けてキリスト者になるようにと、勧めることである。」

この規定の中に「～のもとに行」く、「彼らの間で」という表現がありますが、ここで用いられているラテン語の前置詞はいずれも「inter」です。教会の公式文書では「ad」が用いられることが多いようです。第二バチカン公会議公文書「教会の宣教活動に関する教令」には AG という略号が当てられています。これは、Ad gentes（諸民族のもとへ）という言葉で文書が始まるからです。前置詞のニュアンスを強調する必要はありませんが、宣教の「方法(modus)」を表現するために敢えて「inter gentes, inter eos」を用いているように思います。そこに、聖フランシスコの宣教についての考え方の特徴があります。まさに、「人々の間でより小さい者として共に福音を生きる」ことが、兄弟たちの存在理由だからです。聖フランシスコが 13 世紀に生きていた事を思うと、これは画期的な発想だと思います。

イスラム教を国教とするパキスタンに派遣されている兄弟、松本貢四郎は、障害を持った子供（イスラム教徒やキリスト教徒の子供）たちが通ってくる施設で奉仕しています。19 年前よりもずっと洗練されていました。そこで子供たちと一緒に遊び、学び、祈り、食卓を囲むスタッフたちの顔は輝いていました。

「海外宣教者を支援する会」の事務局が六本木の聖ヨゼフ修道院にあるご縁から、この度、会長を引き受けることになりました。今後ともよろしく願います。

プロフィール

パウロ・三木 村上 芳隆 ofm

1953 年 福岡市生まれ
1972 年 フランシスコ会入会
1982 年 司祭叙階（札幌、北見、田園調布で司牧）
1988 年 初期養成担当チーム（有期誓願期・修練期）。
1998 年 管区書記（管区本部事務局）
2001 年 副管区長
2013 年 管区長

□■□ 第 74 回運営委員会議事録 □■□

日 時：2019 年 9 月 21 日（土） 15:00~16:40

場 所：フランシスコ会 聖ヨゼフ修道院 2 階会議室

議 事

I. 「きずな」148 号について

- ・今回巻頭言の原稿の到着が早かったが、他の通常のお便りは相変わらず少なかった（担当者から）。
- ・山野内司教様（当会の顧問司教に就任）の巻頭言は、私たちが知りえない記述もあり素晴らしかった。
- ・「お話を聞く会」のポスターを掲載し、周知に努めた。
- ・「宣教者からのお便り」では文章が少なかったが、写真が多かったので内容がよく伝わる。

II. 「きずな」149 号について

- ・巻頭言はフランシスコ会管区長の村上芳隆神父様に依頼することになった。

III. 援助申請審議

- ① インドの Sr. 延江由美子（メデイカル・ミッション・シスターズ）から次の申請があった。
 - ・北東部アッサム州の修道院の 1 つで、5 ～ 12 歳を集めて教育支援をしているが、PC、プロジェクタ、勉強机と椅子、キーボードなど購入費。
 - ・同管区の 2 つの修道院で、カトリック校を卒業し上級学校へ進学する寄宿生の生活を支援するための貯水タンク、簡易ベッド、音響設備などの購入費。

●検討の結果、2 件の合計 175,200 ルピー、約 278,800 円の援助を決定した。
- ② モンゴル共和国の Sr. 小島華子（サレジアン・シスターズ）から、教会や学校を回って音楽教育を行なうための、車のガソリン代 1 年分の 310 ドル (32,727 円) の申請があり、援助を決定した。一時帰国中のシスターに手渡すことができた。
- ③ アフリカのチャド（ライ）の Sr. 平 静代（ショファイユの幼きイエズス修道会）から、「レーヌ・アンティエ幼稚園」の子供用机 20、椅子 90 脚（木製）購入費の申請があった。すでに修理不可能状態であるため、検討の結果 1646.45 ユーロ（200,208 円）の援助を決定した。
- ④ ドミニカ共和国の Sr. 小森雅子（ショファイユの幼きイエズス修道会）から、「レーヌ・アンティエ 小学校」の机付きの椅子 120 脚、教師の机、椅子購入費として 7,500 ドル 826,050 円の申請があり、援助を決定した。
- ⑤ フィリピン（ブラカン）の Sr. 弘田鎮江（ベリス・メルセス宣教修道女会）は、共同体としてのエコシステムを生かす「ケアス」の活動で、薬草、有機野菜や果物、キノコ類

の栽培を通して体験と学び、祈りの場を提供している。栽培やコンポスト作り、管理費などの費用として年間、4,300 ドル（473,602 円）の申請があり、援助を決定した。

- 5 件すべて承認され、今回の送金総額は、ドル送金分 4,610 ドルと 1,305,058 円になった。

IV. その他

1. 「現在の会則はかなり前のものであるため、顧問司教名や会長、運営委員の名前の変更が必要となり、運営委員会で検討し承認された。
2. 会長をフランシスコ会日本管区、管区長の村上芳隆神父に依頼し、正式に本日 9 月 21 日付けで承認された（既に 6 月末から活動していただいている）。
3. 「宣教者のお話を聞く会」について
 - ・ 10 月 5 日（土）13:30 ～ 15:30（開場 13:00）
幼きイエス会ニコラ・バレ修道院 9 階ホール
Sr. 佐野浩子（マリアの宣教者フランシスコ修道会）
「アフリカ コンゴで 40 年の宣教によりコンゴの現状とアフリカへの思い」
村上芳隆神父（フランシスコ会管区長）
「フランシスカンの宣教者派遣—パキスタン」
4. 現在ドンボスコ社より毎月「カトリック生活」を 20 冊寄贈していただいているが、今後、50 冊に増やして下さることになった。感謝して海外の宣教者に送りたい。
5. 「きずな」148 号の発送作業は 9 月 5 日瀬田のマリアの宣教者フランシスコ修道院で、3,050 通を 11 名で実施。エスコラピアスの新ポスチュラント（ベトナム人）の参加もあった。
また、9 月 6 日には、六本木事務所で海外 126 通、国内大口 24 通合計 150 通を 2 名で発送。
6. 教会行事に参加（販売）について
 - ・ カトリック徳田教会では 10 月 20 日「徳田教会まつり」に販売などで参加し、会の活動を知っていただいた。
 - ・ カトリック成城教会では 10 月 27 日「タデオ祭」に参加、修道院製のお菓子等を販売し皆様に会の事を知っていただくよい機会になった。
7. 10 月から郵便費の値上がりがあるが、今のところ郵便物や雑誌などの発送は、皆様からのご寄付で賄えているので大変助かっている。
8. 次回運営委員会 12 月 7 日（土）15:00 ～



宣教者からのお便り



メキシコ

◆チアパス◆

待ちに待った車が車庫に！

ベリス・メルセス宣教修道女会 真 神 シ ゲ

自動車のお金も払いました。手続きも終わりました。車庫も作りました。なのに、なのに～！自動車が修道院の庭にないのでしょうか？本当は9月17日に自動車を取りに行く予定でした。全員で取りに行くと決めてこの日を待っていました。ところが、16日に村の道路工事が始まりました、突然に、、、!? 土を掘り起こし、アスファルト道にするそうです。2週間はかかるから、車は使えないよ、とのこと!! はは～ん、「ここはチアパスじゃ!」の思いを強くしました。車がソヤ村を走るのは、10月ですね。

*

昨夜、10月15日夜9時に新車がソヤの修道院に着きました。バンザ～～イ!! この日、朝8時にサンクリストバルに向かいました。戻ったのが、夜の9時。会社側の書類が整っていないということで待ちました。その作成者が昼食に行って、戻ったのが4時、それから書類を書き終わったのが6時。やっと新車に乗ってソヤに向かったのですが、ガソリンがちょっぴりしか入ってなくて、ガソリンスタンドによって満タンにして、大雨の中ソヤに着きました。翌朝見ると、車はちゃんと車庫に納まっていました。

ここまでの道のりで助けていただいたこと、



新しい車と3人の姉妹

お世話になったことごとを感謝して朝の祈りを終わりました。改めて支援する会の皆様に深く感謝いたします。

ドミニカ

◆サンティアゴ◆

小学校の設備補充のお願い

ショファイユの幼きイエズス修道会 小 森 雅 子

ご無沙汰しております。以前、小学校のミニバス購入に際してご支援をいただきました。今回は緊急のお願いとなってしまいましたが、よろしくお願いいたします。

こちらの学校の授業は午前、午後の二部制ですが、数年前から国の方針で、一日授業へ移行が進められています。本校は以前は私立でしたが、貧しい地区にあるので授業料が払えない家庭が増えたため、現在はほぼすべてが補助の対象となりました。以前は1クラス25人の児童でしたが、今は35人を受け入れて、国の基準を満たすことが必須となりました。教師の給料



や消耗品の購入なども、たくさんの書類と時間をかけて予算と許可を取りますが、時には飲み水もトイレトペーパーもない時があります。延長授業を始めるに当たり、国から不足の教師の任命と設備を整えると説明がありましたが、まだ何も行なわれておりません。

こちらの学校制度は小学校入学前のプレ1年生から、小学校1～8年までの9年間が初等教育で、全員が同じ校舎で学んでいます。延長授業により教室が足りませんので、7、8年生はほかの学校に行くよう指導がありました。

こちらの新学期は8月19日からですが、椅子や机、黒板が足りず授業を始められない状態で、サンティアゴ市の多くの学校が同じです。これ以上授業を遅らせることはできないので、椅子のないクラスは床に座って授業を受けることになりました。生徒達が少しでもよい環境で学習できるよう、援助の申請をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

チャド ◆ライ◆

長期にわたる独裁政治

ショファイユの幼きイエズス修道会 泉 淑 美

チャド共和国は、何度かの内戦や内乱を経て、現在のイスラム系のイドリス・デビー・イトゥ

ノ大統領はクーデターで政権を確保し、25年以上ほぼ独裁政治を続けています。フランス領であったため、とりあえずキリスト教は受け入れていて、公用語はフランス語とアラブ語が主となっています。今も内戦が続いて国が安定せず、選挙が実施されるようになって、不正の影がつきまとい、国際選挙監視団からも指摘を受けたりしています。

日常生活では、国家公務員も給料が未払いになったりすることもあり、そうすると公的機関などがストライキに入ることも多く、役所の仕事もすべてストップしてしまう。そのため何をするにも生活が前に進まなくなってしまうのです。

現在の学校は1学年2クラスで85人の生徒が在籍していますが、その数は常に流動的。なぜなら子供がいきなりどこかに行ってしまう、学校に来なくなったりするからです。街に行ってしまうとか、駆け落ちをするなどで。修道会からは3人の先生を派遣しています。生徒から授業料として年間に1,200円ほどしか集めていないため、修道会から補填しなければ維持費はどこからも出ないのです。ほとんどの生徒が上級の学校に行けないため、それだからこそ学校での基本の勉強がとても大事になってくるのです。家庭においては必ず女の人も働いている、それどころか子供も何かしら働き、父親ばかりでなく全員で働かなければ食べて行けない状態、これが実際の日常です。



地元の人が描いた絵画
Sr. 泉からのおみやげ

チャド ◆ライ◆

雨の中無事に到着

シヨファイユの幼きイエズス修道会 松 山 浩 子

今年は雨が多く川が溢れていました。それでも何とか一時帰国から無事に修道院へたどり着く事ができ、心から感謝しました。日本はどここの修道院も高齢化が進み、海外宣教とか新たな海外での活動などとてもないかもしれませんが、貧しい国の人々は苦しみながらも喜んで奉仕をしてくれます。少しでも暮らしが改善されますように、何とか共同体が協力していきたいと思います！

南スーダン ◆グンボ◆

南スーダンより感謝を込めて

イエスのカリタス修道女会 下 崎 優 子

いつも温かいご支援をありがとうございます。3年半ぶりに日本へ戻りました。皆様からの支援金により、食糧難にある南スーダン・グンボ村の人々に食糧支援することができました。

2016年7月に起こった内戦により、国内はまだ安定せず、皆様からいただいたお金を、銀行から取り出すことができず、1年半かけてやっと引き出すことができました。それで、さっそく日本のお米にあたる主食のトウモロコシの粉を配布し、人々の生活を支えることができました。2019年現在、人々の暮らしはさほど変わりませんが、それでも私達は、自立していくように人々を促し、7月から始まった雨季に、

畑を耕し、イモや野菜、ピーナッツなどを作り、自給自足で生活をしていくように取り組んでいます。

いつも私たちは、支援物を配るときに彼らに話すことがあります。日本をはじめ、いくつかの国の人たちは、自分の生活の中からお金を寄付してくださっています。決して、みながお金に余裕があるからあなたたちを支援しているのではなく、痛みを分かち合いながら、助けてもらっていること。だから、今は難しいかもしれないけれど、今度は自活できて、さらに人を助けることができるようになるまで、頑張っていきたいといけなく、と叱咤激励しています。

長く続く戦争によって、ただ受けること、しかももらうことが当たり前だという思いを持っている、彼らのメンタリティーを変えることは



個人カードを発行



トウモロコシの袋を配布

容易ではありませんが、私達がここで宣教を始めて8年経ち、少しずつそのことを理解してきているようです。今では、教会で食糧支援の日には、初めにお祈りをし、支援者の方のためにも祈るのですが、帰るときは、私に「あなたの国のお金をくださった人にお礼を言ってください」という人が出てきました。これは、本当に大きな変化です。

これから南スーダンは、11月半ばごろ、クーデターを起こした元副大統領が、元の地位に戻り、3度目の平和構築に挑戦しようとしています。しかし、国民は、どうせまた「ケンカ」が始まるだろう、と希望を持ってはいません。私達、教会や宣教師の役割は、神が信仰、希望、愛であり、祈り続けること。決して希望を失ってはいけないことを言い続け、彼らと歩んで行こうとしています。待降節も間近いこの季節、希望と愛、平和を運んでくださる幼子イエス様の前にひざまづき、新しい年、新しい国づくりをして行くことができますように、皆様のお祈りをお願いいたします。私達も、南スーダンの人々とともに、皆様に感謝すると共にお祈りいたします。

タンザニア ◆ナミレンベ◆

8月に帰国しました

天使の聖母宣教修道女会 杉山 あさ子

やっとな穏やかな日本の秋の日を楽しめるようになりました。過日の台風19号によって被災された方々のことを思うと心が痛みます。一日も早い復興を心から祈っております。

さて、私は8月1日にアフリカのタンザニアから帰国しました。長い間皆さま方の物心両面にわたるご支援によって、宣教活動が続けることができましたことに心から感謝いたしております。今は、日本社会への再適応に励みながら、文化の違う兄弟、姉妹からいただいた恵みを、置かれた場を通して生かしますようお願いしております。ご報告が遅くなりましたが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

カンボジア ◆プノンペン◆

子供たちの教育や健康を充実させるために

JLMM（信徒宣教師会）浅野 美幸

近年、カンボジアの首都プノンペンは目覚ましく経済発展していますが、同時に貧富の格差が広がっています。プノンペン市郊外ステンミエンチャイ地区に住み、ゴミ集積場でごみの中から有価物を収集し生計をたてている人たちは、貧困の悪循環に陥り、なかなか貧困から抜け出すことができないでいます。JLMMは1998年より小学校に入学しても途中で止めてしまう子どもが多いこの地域で、就学前の子どもたちへの識字教育や情操教育を行なう「子どもの家」を運営しています。また同時に、「母親が変われば家族が変わる」というコンセプトのもとに、母親が保健衛生や栄養改善について、共に学べる場をつくり、仕事の機会を提供してきました。

日本では7歳になったら小学校に入学しますが、カンボジアでは家庭の事情で11歳、12歳になってから小学校に入学する子供もいます。また退学が一番の原因は貧困です。子供は、学

校に行くよりも、家族の経済を助けるための重要な働き手として、労働力と見なされてしまうという現状があります。子供が安心して教育を受けられる環境を作るためには、親の教育への理解と家族の経済力が必要になります。

そこで JLMM では、ごみ収集に代わる衛生的で安定した収入を得る手段として、「屋台貸出しプロジェクト」を開始、母親達に仕事の機会を提供しています。母親達は小学校の前などでアイス菓子やクレープ菓子を屋台で販売しています。2017 年からはカンボジア産のコーヒーを使ったドリップパックコーヒーの生産販売を始め、より多くの母親達にごみ収集に代わる仕事を提供してきました。

さらに、現在は「公益信託 今井記念海外協力基金」からの助成により、「生活習慣病の予防と改善のための『おから』を使った栄養食の開発と普及プロジェクト」を実施しています。カンボジアでは、豆乳は好んで飲まれています。その搾りかすであるおからは家畜の餌として使われるか、廃棄されていました。その安価で購入可能なおからを有効利用して、カンボジア人の口に合う料理を開発。地域住民に紹介するために開催した「健康祭り」では、母親達が低カロリーで高たんぱくの栄養価の高いおからに、大変興味を持つようになりました。そこで、さらにこのおからを使ったお菓子を開発・販売し、栄養補完食材として広めるとともに、母親の収入創出事業にして、多くの母親への収入増に繋げていきたいと思いました。

おからは多くの食物繊維とたんぱく質を含んでいます。経済的な理由から充分なたんぱく質が摂取できない人達に、ぜひ食べてもらいたい

食材です。おからのお菓子が開発・商品化されカンボジア国内外で販売されることにより、特に貧困地域住民への栄養補完食材としておからの効果が広がり栄養改善につながるでしょう。新しく始まる「お母さん達の収入創出のためのおから菓子開発」によって、ゴミ収集に代わる母親達の安定した収入が確保され、地域の子どもの教育や健康が充実されることを願っています。

インド ◆プネ◆

なつかしい人々との再会

メディカルミッション・シスターズ (MMS) 延 江 由美子

プネは、ムンバイから南東に 200km ほどのところにある都市です。2007 年、私はここにある私共の修道会の「Holistic Health Centre (日本でいう統合医療)」に派遣され、7 年ほど生活しました。鍼を習ったのもこの鍼診療所です。プネのあるマハラシュトラ州では、ヒンディー語より難しくそしてずっと洗練された言語のマラティ語が公用語です。当初ヒンディー語かマラティ語のどちらを学ぶべきか迷いましたが、この州でずっと奉仕するつもりでしたし、村の人々、とりわけ女性の多くはヒンディー語を知らないのです、思い切ってマラティ語にチャレンジしました。遅々として上達せず自己嫌悪でガククリ落ち込むこともしばしばでしたが、その努力は報われました。というのも、マラティ語を話すことで地元の人達との交流はずっと命のあるものとなったと思われます。とりわけ、フルガオン（フルは花、ガオンは村）という村でささやかな地域医療に携わった数年は、今

でも心の宝物。折にふれ、“I loved them and they loved me…” としみじみと思い返します。

そして、インドのカースト制度という現実を直接垣間見たのもプネでした。バハサヘブ・アンベドカーという『インド憲法』を草案した人はマハラシュトラ出身で、ダリットというもっとも虐げられた階級に属していました。彼はカースト制から自由になる手段として仏教に改宗し、多くのダリットが彼に倣って仏教徒になったのです。当時 MMS の診療所で働いていたラーニもその一人。彼女と私はとても気が合って、彼女が同じ階級の人々と身を寄せ合って住んでいるところに何度も足を運び、やがてそこもまた私にとって“いつでも帰ることができる場所”となったのです。

今回は北東部に赴く前に、鍼治療を復習する



プネの子供たち



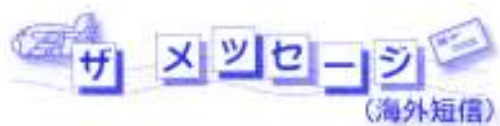
ラーニと仲間たちと



べく古巣のプネにやってきました。ムンバイ空港の入国審査で、「ありがとうございます」と私がマラティ語で言った時の管理官のリアクションに心をくすぐられる思いをしました。プネの修道院までのリムジンは乗り合いのはずが乗客は私一人という幸運に恵まれ、6時間の道のりもゆっくりと体を伸ばして寝ることが出来、これはなんだか縁起がいい感じ？確かに。あいにくの台風でその滞在は丸2日削られてしまいましたが、MMSの姉妹たち、ラーニと仲間たち、フルガオンで共に働いたなつかしい人々と、心踊るみっちり充実した5日を過ごすことが出来ました。

それにしても、かつてプネはマハラシュトラ文化の香り高い閑静な町でしたが、その面影も今となっては何処へやら。ここ十数年の猛烈な開発で、人も車もモーターバイクもそれはもう大変な量。新しく豪勢なマンションがあちらこちらに林立していて、その周りにはなんとも味気ないモールや単にきらびやかなだけのお店が軒を並べています。北東部の田舎暮らしに慣れ親しんだ身としては、とてもついていけません。

プネはまだ雨季。到着した時は東京よりずっと涼しかったです。



* ハイチ

レデンプトリスチン修道会 飯村美紀子

しばらく留守にしておりましたら、お送りくださった封筒が5つも待っておりました！事務局の皆様は酷暑の中、私共のためにご用意くださったのかと、改めて感謝申し上げます。たくさんさんの「カトリック生活」誌、「心のともしび」、「聖母の騎士」誌などを目の前にして、急にお大尽？になったような気分になりました！皆様の上に、主の愛が豊かなお恵みとなって注がれますように。ありがとうございました。

* ショファイユの幼きイエズス修道会

海外担当 林 優子

いつも私共の修道会の海外宣教のためにご支援いただきありがとうございます。またこの度はドミニカのために多額のご支援金をありがと

うございました。大切にに使わせていただきます。心より感謝申し上げます。



▽いつも「きずな」をありがとうございます。新会長様、顧問司教様の上に神様の豊かな祝福がありますようお祈り申し上げます。

(鹿児島県鹿児島市 岩崎正幸)

▽久しく瀬田の修道院での発送作業に行けずにおりますが、また皆様と共に過ごせる日を楽しみにしております。

(神奈川県横浜市 長田弘子)

▽宣教者の皆様、スタッフの皆様お元気ですか。お体を大切にお過ごしください。

(福岡県福岡市 長谷川千恵)

▽妻はなくなりましたが、送金させていただきます。(沖縄県うるま市 翁長丈高)



事務局訪問の宣教者

8月23日 ————— チャド



ショファイユの幼きイエズス修道会

Sr. 松山浩子

以前、事務局を尋ねたことが懐かしいです。あっという間ですね。またこちらに来られてよかったです。今日は急ぎますので、Sr. 泉を残して帰ります。支援者の皆様に感謝をお伝えください。

8月23日 ————— チャド



ショファイユの幼きイエズス修道会

Sr. 泉 叔美

ご挨拶に伺えて本当によかったです。ゆっくりとお話を聞いていただき、やっと胸のつかえを取ることができました。現地でなかなか思うとおりに行くことばかりではないですが、日本に帰ってリフレッシュしてまた戻りたいと思います。ご支援者の皆様によろしくお伝

えくください。

9月10日 ————— カンボジア



JLMM (信徒宣教会)

井手 司

カンボジアでの5年半の任期を終えて帰国しました。「海外宣教者を支援する会」様からは、コンボンルアン教会と学校運営のために、支援をいただき心から感謝申し上げます。JLMMは今後もカンボジア・プノンペンでの活動を続けていきますので、お祈りを願います。

11月12日 ————— 南スーダン

イエスのカリタス修道女会



Sr. 下崎優子

長い間、お礼を申しあげたいと思いながらようやくおたずねできました。2017年6月に緊急食糧支援のため50万円をいただきましたが、当時は南スーダンの銀行にはドルがなく、主任神父様が立替えしてくださり、トウモロコシ粉を売るムスリムたちは、シスターは必ず払ってくれるからとお金がなくとも分けてくれました。あの時は本当にありがとうございました。

事務局の活動から

「徳田祭り」に参加 波多野運営委員

秋晴れに恵まれた10月20日、徳田教会で「徳田まつり」が行なわれ、大勢のお客様をお迎えしました。今年から「まつり」という名称に変わり、何かを変えていこうという工夫もなされていました。今年も「海外宣教者を支援する会」の名で出店しました。買おうかどうか迷っているお客様には、「この売り上げは海外で福音のために働いておられる宣教者に送ります」とお伝えします。すると「じゃあ、いただきましょう！」と笑顔でお買い上げ。小さな売り子さんも登場し、楽しい一日となりました。

「タデオ祭」に参加 後藤運営委員 山田事務局長

毎年10月の最後の日曜日、成城教会ではこの日を保護聖人「聖タデオ」にちなんで「タデオ祭」を開催します。私たちの会は毎月の「対外協力デー」にも参加させていただいており、この日も各地の修道会のお菓子を出店販売させていただきました。売り上げは宣教者のお役に立てるということで、仕入れたお菓子を完売するほど盛況でした。

サレジオ会本部をお訪ねしました 山田事務局長

9月14日、四谷のサレジオ会本部修道院をお訪ねしました。修道院長であり「ドン・ボスコ社」の関谷義樹神父様と、同社の富岡浩二さんにこれまで「カトリック生活」を寄贈していただいているお礼を申し上げます。そしてこの度、さらに30冊も多い50冊を引き続きいただ

るという、ありがたいお話をいただきました。海外で日本語の雑誌を待っている宣教者の皆さんに代わり、感謝申し上げます。宣教者の皆さんは、来る日も来る日も終わりのない活動の合間に、日本からのカトリック雑誌などをとても楽しみにしておられ、そのようなメールやお手紙をよくいただいていることもご報告しました。

宣教者の皆さん、「カトリック生活を」新たに送ってほしいと希望される方は、ご遠慮なくお申し出ください。お待ちしております。



関谷神父と富岡さん

海外宣教者のお話を聞く会

今年「宣教者のお話を聞く会」は10月5日（土）の午後、東京四谷のニコラバレ修道院の9階ホールで開催されました。アフリカのコンゴで39年間の宣教を終えて帰国されたシスター佐野浩子（マリアの宣教者フランシスコ修道会・FMM）と、当会会長をお引き受けくださった村上芳隆神父（フランシスコ会・OFM 管区長）のパキスタン訪問のお話に、画像、動画を見ながら参加者は熱心に耳を傾けました。

国名がザイールからコンゴ民主共和国へ

マリア・アスンタ 佐野 浩 子



1980年、ザイールに派遣されることになった。まずフランス語習得のためフランスへ。その時ローマで各国から来たシスター方と6か月のセッションがあった。親しくなったアフリカのシスターに血圧を測ってと頼まれる。120 - 60という申し分ない血圧。それを伝えると大泣きして叫ぶ。私は死ぬ！と。皆でなだめてよく聞くと、12 - 6というので3桁は死ぬときの血圧だという。これが初めてのカルチャーショックだった。さらに、熱帯医学のライセンスも必要となり、再びフランスへ。

コンゴは1960年にベルギーから独立後、モブツ大統領が独裁政治を行なう。反政府勢力だったカビラ大統領が就任して国名をコンゴ民主共和国とする。アフリカ大陸の赤道直下に位置し、周囲を9か国に囲まれた国である。首都はキンシャサ、人口は8,000万人、6～9月は乾期で大変暑く、一滴の雨も降らない。平均寿命は46.7歳といわれ、当時、年寄りはいくらもいなかった。国内の宗教はカトリックが50%、プロテスタントが30%、イスラム教や伝統的な古い宗教などがあ

る。公用語はフランス語、アフリカの言語のスワヒリ語やコンゴ語などいくつか認められているが、230もの部族がありそれぞれの言葉がある。

第二の都市のルブンバシに住んでいたが、司教座聖堂もあり、修道院もある。管区の宣教者60人くらい集まって、畑を耕してミカンやトウモロコシを、またニワトリや牛など飼って生活している。乗り物はオートバイが多く、タクシーはトヨタ車。人々はトラックに売る荷物を満杯に積み、その上に人が乗っている。また、リアカーで廃品回収をしている人もいる。

看護師としていくつかの村の診療所を担当したが、たどり着くまでには橋がない、道がよくないという所が多い。人々は独裁政治下でも明るく、人々の接触は密である。診療所にはドクターがいないので、その役目も果たすことも。結核、ハンセン病もまだまだある。子供センターや診療所には、栄養不足でやせ細ってやっと生きている状態、あるいはたんぱく質不足でむくんだ状態の村人がやってくる。そんな時は“大豆がゆ”を作って食べさせる指導をすると、2～3か月で健康を取り戻し、表情のなかった顔が笑顔になる。時々厳しい状態になった人が来る。聞いてみると、まず薬草をのませる、魔術師を呼ぶ、厄払いをするなど一通りやってから、診療所へというケースが多いので、手遅れということもある。

修道院に着いて最初に聖体礼拝をした。その聖歌が「主はわれらの牧者（詩編23）」だった。主



はわれらの牧者 私は乏しいことがない、たとえ死の影の谷を歩んでも 私は災いを恐れない、あなたは私と共におられ、その鞭と杖は私を護る、ということばに、神様に信頼してすべてをゆだねる気持ちが確かなものになり、その後39年間のコンゴでの生活のさまざまなシーンで、支えられてきたことをなつかしく思い出す。

現在、コンゴではエボラ出血熱の流行で渡航が制限されているが、コンゴへの思いは尽きない。

パキスタンのカラチの修道院訪問

フランシスコ会管区長 村上芳隆

9月8～12日までカラチにある本部修道院を訪ねた。フェンスで囲まれた広大な土地にたくさんの施設——本部修道院、養成修道院（有志志願者）、修練院、神学校、大神学院、そしてグラン

ドやミニ動物園など——がある。今回は特に、1993 年から「フランシスコセンター」の障がい者通所施設で働いているブラザー松本貢四郎に会いに行き話を聞いた。

パキстанは 1947 年、インドと共にイギリス植民地支配から独立し「パキスタンイスラム共和国」となった。首都はイスラマバードだが、最も大きい都市はカラチ。人口は 2 億人を超え、イスラム教が国教であるが、キリスト教は人口の 2% くらいで、半数がカトリックで約 200 万人。司祭は約 300 人、修道女が 800 人、修道士が 60 人くらいといわれ、その中でフランシスコ会員 40 ～ 50 人。ブラザー松本の障がい者施設は、15 歳までの知的あるいは身体に障がいのある子供たちが、毎日通ってくる施設である。現在 12 名が在籍中（クリスチャンでない子もいる）。送迎は日本から送られたスクールバスを使っている。バスが送迎中に強盗に襲われ、バスだけ持っていかれたことがあった。

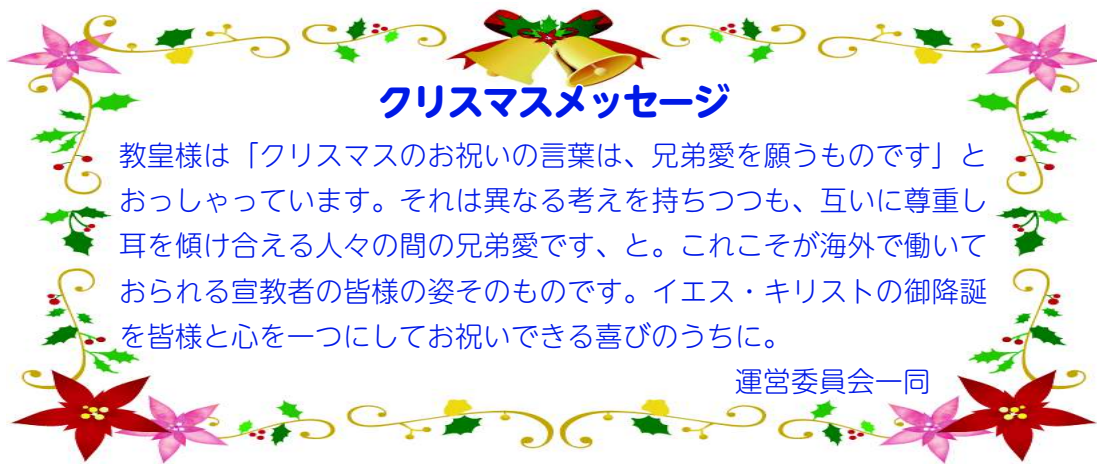


センターでは言葉を覚えるためにウルドゥー語のカードを作り、ゲーム感覚で大きな声を出して楽しく学んでいる。身体に障がいのある子どものためにリハビリ訓練や、マッサージも行なう。手作りの昼食を食べてから、バスで帰宅する毎日である。

フランシスコ会の日本管区が、会員を派遣している国は、中国、フィリピン、韓国、イスラエルなどがある。12 ～ 13 世紀に会則を持つ修道会が、次々に教皇の認可を受け確立していく。その中でフランシスコ会は無所有と清貧をかげ、托鉢修道院ともいわれたが、当初の会則中にすでに、回教徒及び非キリスト教徒の地へ出かけて行くことについて、はっきり記されている（今号の巻頭言を参照）。彼らのところに行き、彼らの間で小さき者として生活すること、つまりそこに存在することが宣教であると考えられていた。

だいぶ前、総長がイタリアから来日し、長崎を訪問した時に大きな計画を提案した。長崎に「国際共同体」を作り、アジアの国々から宣教者を招くというもの。2015 年から少しずつ計画が進んでいることも報告しておきたい。





クリスマスメッセージ

教皇様は「クリスマスのお祝いの言葉は、兄弟愛を願うものです」とおっしゃっています。それは異なる考えを持ちつつも、互いに尊重し耳を傾け合える人々の間の兄弟愛です、と。これこそが海外で働いておられる宣教者の皆様の姿そのものです。イエス・キリストの御降誕を皆様と心をついてお祝いできる喜びのうちに。

運営委員会一同

新入会員 (敬称略)

個人会員 6名

野村 純一（愛知県名古屋市中区） 安江 則子（京都府京都市） 貝塚 三津之（東京都練馬区）
本橋 美恵子（東京都町田市） 村上 八月（東京都練馬区） 前田 紀久子（兵庫県神戸市）

事務局より

§ 今年も残すところわずかとなりましたが、この一年会員の皆様には大変お世話になり、心よりお礼申し上げます。皆様が良いクリスマスと新年をお迎えくださいますようお祈りいたします。

§ 書き損じのハガキや未使用の切手など、いつもお送りくださりありがとうございます。通信費として大切に使用させていただきます。

§ 年末12月24日から1月7日まで休業とさせていただきます。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112

日本カトリック海外宣教者を支援する会

・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会